# 社会学理論はいかなる種類の経験的データを必要とするか

東北大学　　瀧川裕貴

## 1　目的

約 30 年前、A.Abbott は古典となった論文のなかで、社会学理論と社会学的調査の間の増大する亀裂 chasm について指摘をしていた．この亀裂は、今日の社会学においても、基本的には依然として埋まっていないように思える．一方で、経験的方法、とくに量的方法の発展は、この 30 年の間にさらに進み、きわめて高度な統計的手法がいまや日常的に用いられるようになってきている．他方で、社会学理論についていえば、経験的研究との接点をいまだ見出すことはできず、衰退の一途をたどっている．とはいえ、近年では、社会学理論の側から経験的研究との接点を回復しようとする興味深い試みもいくつか生じつつある．例えば、その代表例は P.Hedstörm らの提唱する分析社会学であり、H.White の仕事に端を発する関係社会学である．さらに、調査についていえば、今日では伝統的な質問紙調査に加えて、Web データやデジタルデータの利用、オンライン実験、シミュレーションによる疑似経験的データ、さらには質問紙調査とこれらの組み合わせなどいろいろな可能性が広がりつつある．

本報告の目的は、これら近年の動向を検討しつつ、社会学理論と経験的研究の関係を再考することにある．とくに、社会学理論の側からみて、理論の発展のためにいかなる経験的データが必要とされているか、を検討する．そのために、社会学理論がどのような点で既存の経験的研究やデータソース、分析方法に限界をみているか、実行可能性の範囲内でいかなる経験的データが望まれているのか、近年の新たなデータソースや分析方法は、社会学理論の発展にとって必要な経験的データを提供することができるのかどうか、といった点を議論する．

## 2　方法

議論の基本ステップと用いるデータ（検討対象となる先行研究やデータ）は次の通りである．

まず議論の大前提として、社会学理論の側が、経験的研究に対して開かれている必要がある．ここで技術的に検証困難な理論と原理的に検証不可能な理論を区別しよう．本報告では、後者のような理論は扱わない．社会学理論は、現状では技術的に検証困難であるとしても、新たな方法やデータの取得によって、原理的には経験的な検討に開かれていなければならない．そこでまず、このような性能を備えた社会学理論とはいかなるものであるべきかを、分析社会学や関係社会学をはじめとした近年の有望な理論研究を検討しつつ同定する．

次に上記の手続きによって同定された社会学理論がその検証のためにいかなる経験的データを要求することになるのかを検討する．これについては、Abbott や Hedströrm のようにこの点を比較的明示的に議論している理論を参照しつつ、必要に応じて自ら議論を再構成する．

最後に、必要となる経験的データが、今日の様々な新たなデータソースや方法によってどの程度実際に取得可能となるかを検討する．具体的な検討対象は、上述したように、Web データやデジタルデータの利用、オンライン実験、シミュレーションによる疑似経験的データ等、さらには質問紙調査とこれらの組み合わせであり、これらが社会学理論の新たな発展に寄与する可能性を議論する．また、具体的な例示として、報告者自身による理論と経験的研究の橋渡しの試みをいくつか紹介する．

## 3　結果と結論

上記の議論を通じて、社会学理論と経験的研究とのかい離は原理的に克服不可能なものではなく、様々な新たなデータソースや方法を利用することによって、両者の溝を埋めていくことが可能であるという楽観的見通しを提示したい．